ウルストンクラーフトと同時代女流作家達の共通テーマ

堀出　稔

The Common Theme of Wollstonecraft and Her Contemporary Women Writers

Minoru HORIDE

イギリスフェミニズム思想をさかのぼって行くと，18世紀後半から19世紀中葉にかけても，それに関心を示した多くの思想家や文学者達を見い出すことができる．その中で特にメアリ・ウルストンクラーフトは，いちはやくイギリスフェミニズム思想を体系化した女性であった．一方当時の女流作家達の生涯及び作品にも潜在的にその時代を反映し，フェミニズムが窺えるものもある．そのような女流作家はと言えば，シャーロット・ブロンテ，ジョージ・エリオット，ジェーン・オースティンなどではないだろうか．この思想の流れは，20世紀に入ってヴァージニア・ウルフに受け継がれ，現代においてはマーガレット・ドラブル，ドリス・レッシィング，ミューリエル・スパークなどの作品などに見い出される．このような女流作家達の作品の傾向は当然それぞれ異なるわけであるが，女流作家という観点において何らかの共通テーマがあるように思われる．それは女性達が言葉を活字に残すことのできなかった時代から現代まで，脈々と流れているテーマであろう．最近の女流作家の作品や作品論を読むと，必ずと言ってよいほどこの共通テーマについて論じられる．だが18世紀後半イギリスフェミニズム思想を大系化したウルストンクラーフトに言及されることが少ない．彼女自身，少女期から作家になる夢を見，多作ではないにしても伝記的作品『小説メアリ』，『実生活実話集』，『北欧通信』などの作品を残している．それにもかかわらず女流作家として論じられることの少ないのは，*A Vindication of the Rights of Woman* の著者として，所謂女性擁護論者だと考えられている傾向が強いからであろう．ブロンテ，エリオット，オースティンなどが掲げたテーマとも言える女性の社会におけるより良い在り方についての問は，ウルストンクラーフトにおいても同様であり決して異質のテーマとは思えないのである．この小論においては，*A Vindication of the Rights of Woman* を分析しながら，イギリス女流作家達の生涯と作品に現われたフェミニズム思想を照し合わせ，女性の社会でのより良い在り方を考えていきたいと思う．

ウルストンクラーフトは1759年に生まれ，1797年その生涯を閉じた．1789年にはフランス革命が勃発し，自由・平等・博愛の精神は彼女に深く影響を与えた．当時のイギリスは，フランス革命の影響と産業革命の荒波の中，人々の生活の基盤が揺いでいく時代であった．産業の変革によって熟練労働者の雇用の意味がなくなり，多くの工業労働者が出現した．中小規模の農民は土地を追われ，婦女子の重労働が社会的に問題化していた．彼女の父は没落した中産階級であり，生活に困る家庭ではなかったが，家を没落させた父の絶望感と暴力，夫に従うだけの無力な母の姿を見て育った．彼女の生涯の問は，母の姿を悲しい気持ちで眺めることから始った．それは従うだけの無力の母のような女性になるのではなく，自立した人間の権利を主張できる女性になることであった．特に彼女は生涯において当時の急進的思想家ウイリアム・ゴドウィンとの結婚によって，その課題は増々理論化されていった．彼女の問いかけは中々イ

ギリス社会に受け入れられなかったが，歴史が進むにつれ彼女の問いかけの正しさが実証されていくと言っても過言ではない．ウルストンクラーフトが *A Vindication of the Rights of Woman* において主張した主な事柄は次のようである．

> To render women truly useful members of society, I argue that they should be led, by having their understandings cultivated on a large scale, to acquire a rational affection for their country, founded on knowledge, . . .[1]

女性が社会における useful members になるためには，彼女らの知性が大きな規模で開発されること．それによって国家の有用な人材になれると考え，そのために女性の教育の重要性を指摘している．

> Consequently, the most perfect education, in my opinion, is such an exercise of the understanding as is best calculated to strengthen the body and from the heart. Or, in other words, to enable the individual to attain such habits of virtue as will render it independent.[2]

彼女にとって最も完全な女子教育とは，肉体及び心の鍛練と同様に an exercise of the understanding すなわち知性の訓練を掲げている．別の表現では，個人を独立させる美徳を獲得する習慣を身につけるように述べている．この問は，当時のイギリス上流階級における女性観に対する批判を示している．例えば上流階級の女性は，その時代の最も注目されたフランス社交界の流行をすべて良いものとして受け入れる傾向があった．だがその当時のフランス上流階級及び社交界は，豪華絢爛とした外面とはほど遠く，精神面においては頽廃し，上辺だけの上品さ，不道徳，虚栄心が目立っていた．女性は男性の求婚の意志を得るために，男性の気に入る存在にならなければならなかった．か弱く，デリケイトで，たとえ教養があっても何も知らないように振舞うことを尊ばれた．しかしマナーが過度になり，マナーの背後の人間としての道徳律が忘れ去られた時，人間性は堕落することになったのである．このようなフランス社交界の影響はイギリス上流階級にも広がり，中流階級の女性達も良いものとして模倣するようになった．中流階級に所属していたウルストンクラーフトは，イギリス女性のこの傾向に警鐘を打ち鳴らしたのは当然と言ってよいだろう．それと共に男性本位の女性観で当時の女性達に影響を与えた女子教育論者達をも批判した．

> –But if he only meant to say that the exercise of the faculties will produce this foundness–I deny it.[3]

これは，ジョン・グレゴリー博士が女子教育のため書いた著書*A Father's Legacy to his Daughters* の内容に対する反対意見である．博士は娘達の衣裳への fondness が生まれつきのものであり，彼女らの様々な能力を磨いたとしても，究極的に女性には衣裳への愛着が残ると言っていることに対して否定している．ウルストンクラーフトは，グレゴリー，フォーダイス両博士の女子教育論が当時広く読まれていたのであるが，彼らの教育論に人間としての女性の視点が無視されていると指摘している．このような女子教育論には，ほとんど娘達が内気で男性からの保護を望み，女らしさを維持し，男性に気に入られる存在であることを強調されていると言うのである．彼女は男性と同様に，女性のあらゆる能力の可能性を見い出すことのできる教育の重要性を世に問い，男性と女性が互いに同志と考えられる存在であることを願ったようである．彼女は18世紀後半にすでに20世紀現代の女性像をはっきりと想い描いていたと言える．例えば女性参政権について，次のように述べている．

> I may excite laughter, by dropping an hint, which I mean to pursue, some future time,

for I really think that women ought to have representatives, instead of being arbitrarily governed without having any direct share allowed them in the deliberations of government.[4]

フランス革命の影響が18世紀後半のイギリス社会に衝撃を与えたとしても，当時のイギリス女性は，家庭にあって妻として母として，夫の意見に従うことを義務づけられていた時代である．その時代に早くも彼女は，女性の政治参加を考えていたのである．さらに彼女は，女性が経済的に自立することが，女性の人間としての権利の確立には重要であることを指摘した．このようにウルストンクラーフトが，*A Vindication of the Rights of Woman* で世に問いかけた課題は，様々な苦難を経てようやく今日実現されつつあると言える．

さて18世紀後半から19世紀中葉にかけて活躍した女流作家は生涯と作品の中に，ウルストンクラーフトのようなフェミニズム思想が窺われるであろうか．文学作品と作家の想像力を駆使して，普遍的な何かを読者に訴える一面がある．それ故に，フェミニズム思想を前面に出し，文学作品を形成する女流作家がいると断言することは不可能であろう．ただ現代の読者が，フェミニズム的視点から作品を分析していくと，当時の女流作家の生涯と作品の中にフェミニズム思想の断片を見い出すことは可能であろう．ここで取り上げる女流作家は，シャーロット・ブロンテ，ジョージ・エリオット，ジェイン・オースティンである．

シャーロット・ブロンテの場合，彼女の妹達とは異なり，かなり幼年期より社会の動向，政治などに関心を示した．特にフェミニズムに関しては，ギャスケル夫人の*The Life of Charlotte Brontë* の中に女子教育に関する著書を読んでいる形跡がある．

'Amongst the especially welcome works are "Southey's Life," the "Women of France," Hazlitt's "Essays," Emerson's "Representative Men;" but it seems invidious to particularise when all are good... I took up a second small book, Scott's "Suggestions on Female Education;" that, too, I read, and with unalloyed pleasure.[5]

出版社に送ってもらった書物の中に，*the Women of France* やアレクサンダー・スコットの書いた *Suggestions on Female Education* などがあった．特に *Suggestions on Female Education* を unalloyed pleasure で読んだと記している．シャーロットは妹達と共にガバネスとして他の家の子供達を教えたり，ヨークシャーの自宅で塾を開く計画を立たりした．これらはすべて家庭の経済を維持するためであったが，女子の教育に関して多いに関心を持っていたにちがいない．また当時のイギリスの若い女性達について，次のように述べている．

...; in these days women may be thoughtful and well read, without being stigmatised as "Blues" and "Pedants".[6]

"Blues" はイギリス青踏派である．彼女はこのようなサロン的フェミニズム活動には参加しなかった．彼女はまた *The Westminster Review* に記載された "Woman's Mission" という女性論の記事について意見を述べている．

Men begin to regard the position of woman in another light than they used to do; and a few men, whose sympathies are fine and whose sense of justice is strong, think and speak of it with a candour that commands my admiration. They say, however—and, to an extent, truly—that the amelioration of our condition depends on ourselves. Certainly there are evils which our own efforts will best reach; but as certainly there are other evils—deep-rooted in the foundations of the social system—which no efforts of ours can touch; of which we cannot complain; of which it is advisable not too often to think.[7]

シャーロットはこの女性論を読み，当時少しづつ男性が女性の the position of woman に理解を示して来ていることを知る．しかし女性のより良い在り方は，究極的に ourselves で表現されているように女性自身によることや，社会制度には深く根ざした女性にはどうしようもない事柄をも理解した．彼女はこのような女性にとって好ましくない社会情況を組織に入って改革するといった行き方はせず，彼女自身の文学作品によってそれを世に問うていたようである．シャーロットの『ジェイン・エア』において彼女は，厳しい因襲の多い当時の社会の中で，一人の女性が自我に目覚め，女性のより良い生き方を求め試行錯誤している様子を描いていると解釈してもよいのではないだろうか．

次にジョージ・エリオット（メアリ・アン・エヴァンス）であるが，彼女はその時代のフェミニズム思想を直接感受し育だった作家と言える．エリオットは22歳の頃，宗教上の問題で絶対的服従をしいた父と対立したことがあった．自立の道を歩もうとジャーナリストとして活躍，ジョージ・ヘンリ・ルイスと共同生活をするため，周囲の反対を押し切り，結婚の規律を破った罪で教会から破門になった．女性はただ男性に従うことを良いこととしたビクトリア朝時代にあって，計り知れない抑圧を身をもって体験した．エリオットがフェミニズム思想に傾いていったのは当然とも思える．1855年ロンドンの当時影響力のあった雑誌 *The Leader* に "Margaret Fuller and Mary Wollstonecraft" という評論を掲げた．ウルストンクラーフトが世を去って約50年の歳月が経過していた．イギリスにおいては彼女の世評は定まらず，弁護する人，批判する人と様々であった．エリオットは彼女を高く評価し，むしろ彼女の行き方に心酔していたと言っても過言ではない．"Margaret Fuller and Mary Wollstonecraft" において彼女は，マーガレット・フラーの *Women in the Nineteenth Century* とウルストンクラーフトの *A Vindication of the Rights of Woman* とを対照しながら，彼女の女性論を述べている．

> Gerge Eliot introduces the popular Margaret Fuller boldly enough, but she reveals a sense of slight unease when she brings the name of Mary Wollstonecraft into the discussion.[8)]

ウルストンクラーフトの行き方に心酔しているエリオットは，ウルストンクラーフトの言葉を引用するのに，unease な気持になっている．おそらく彼女は当時の流行作家として，世評を気にしてのことであろう．ウルストンクラーフトの wild radicalism な言葉の調子を少し押え気味に論じたと言われる．しかしエリオットは彼女の生涯と意見には賛同している．エリオットの生涯もまたウルストンクラーフトのそれと類似していたのである．それ故に彼女の小説 *Daniel Deronda* においては，ウルストンクラーフトの生涯を思わせる描写をおこなっている．それどころか，*A Vindication of the Rights of Woman* の擁護論を書く準備をしていたほどであった．

> The evidence would suggest, then, that George Eliot had reached, by 1855, the state of mind necessary for the publication of a bold defense of *A Vindication of the Rigthts of Woman*.[9)]

エリオットにとってフェミニズム思想は，ウルストンクラーフトの行き方への感銘と共に，自分自身も the Langham Place feminist circle とかかわりを持ち，絶えず女性のより良い在り方を考えていった女流作家であったと思われる．

さてジェイン・オースティンの場合はどうであろうか．彼女にはフェミニズム思想の影響を窺わせる資料は皆無に等しい．それ故に彼女の小説に現われた女性像によって問われている女性のより良い在り方を考え，フェミニズム思想と結び論じてみたい．

オースティンは牧師の六男二女の下から二番目の娘として1775年，南イングランドのハンプシャに生れた．幼い頃から父の蔵書を読み，一方ピアノ，歌，ダンスのレッスンを受け，外国語を学び，当時のレイディとしての教養を身につけていた．家族全体が文学に関心が深く，流行作家の作品を読んでは，それをもじって自分の物語や劇を作ったと言われる．20歳の時に *Pride and Prejudice* の原作を作り，女流作家の道を歩む．彼女の作品に描く視点は常に変らず，恋愛と結婚であり，そのテーマを中心に人間関係の微妙さをユーモアと風刺的表現をまじえながら描いた．愛情，礼儀正しさ，他者との調和，自負心の過剰への戒といった社会規範に照し合わせながら，恋愛による男女のより良い在り方を考える．このテーマは，ウルストンクラーフトが女子教育において問いかけたより良い女性の在り方についての意見と共通する点が多い．例えば，*Pride and Prejudice* のビングリーの友人ダーシーとエリザベスが結婚に至るまでの2人の誤解，反省，人間的成長といった人格陶汰の過程．*Northanger Abby* に見る若い女性の現実と空想の取り違え．*Pursation* のアンの一途な愛．このような日常にある男女の恋愛の中に，オースティンは人間としての女性のより良い在り方を探究しているように思える．この事は，ウルストンクラーフトが当時の上流階級の女性が人間としての自立心を忘れ，男性に従うだけの道徳律のない態度を批判し，より良い女性像を表明したのと相通じるテーマなのではないだろうか．

さてこの小論においては，世界で始めてフェミニズム思想を体系化したメアリ・ウルストンクラーフトの *A Vindication of the Rights of Woman* のテーマと，当時活躍した3人のイギリス女流作家達の世に問いかけたテーマと共通な何かがあるのかを考察した．作家達の中にはウルストンクラーフトと何のかかわりも持っていない作家もいた．それにもかかわらず，多くの共通のテーマを見い出すことができた．それらは，女性を束縛する社会の因襲，女子教育の確立，女性の自立といった課題である．ウルストンクラーフト同様，3人の女流作家達もそれぞれの視点で，18世紀後半から19世紀中葉にかけて，イギリスの波乱に満ちた社会の動向をながめ，一人一人がフェミニズム的思想を育み歩んでいったのではないだろうか．

Notes

1) Wollstonecraft, Mary: *A Vindication of the Rights of Woman* , 191, W. W. Norton & Company. Inc. (1975)
2) *Ibid*., 21
3) *Ibid*., 28
4) *Ibid*., 148
5) Gaskell, Elizabeth: *The Life of Charlotte Brontë*, 449, Smith, Elder, & Co. (1900)
6) *Ibid*., 449
7) *Ibid*., 475
8) Delamont, S. and Duffin, L.: *The Nineteenth-Century Woman* , 195, Croom Helm (1978)
9) *Ibid*., 194